596-343
1200501528132
596
43
複写

一九三一年詩集

詩人協会

一九三一年詩集

詩人協會編

アトリエ社刊

S-96-343

序

千九百三十一年詩集。

本集は詩人協會の第二年刊詩集であると共に、その最後の詞華集である。此の記念すべき詩集を遺して、詩人協會は玆に解散する。

千九百二十八年の一月、本會が創立されて以來、我々は一に詩人相互の親睦と共濟、二に擁護と進展とを主旨として、鋭意之が實現に努めむとし、又些かながら正しい行爲に終始し得たかと思ふ。卽ち内には會員の幸不幸に處し、外には雜誌、詩と評論、詩人年鑑、千九百三十年詩集等の上梓、竝びに詩人祭等の事業を成就したのである。

然るに千九百三十一年の一月、その第四回の總會に於いて、會員協議の結果、愈々會の歷史的使命を果したものとして、本會は遂に解放した。

而もまた、本集は會の最後の事業として、全會員の作品を殆ど網羅し、寧ろ淸算的にその有

終の美を滿さうとするものである。輯むるに作者百十八人名、作品數百三十六篇、その中、會員として昨年まで會と行動を共にされたよき記憶により、今は亡き生田春月、府川惠造、柴山晴美の三氏の作品が特に之に加へらるることになつた。

なほ、本集の出版には總會出席者の提案によつて、會の基金の殘金を出版費の一部として充當したことをも承知していただきたい。

終に輝かしい日本詩界の本來に向つて、玆にその多幸と新詩人の出現とを翹望し祝福する。

千九百三十一年四月

詩人協會

一九三一年詩集・目次

赤川草夫……二
雨雪・父
天野隆一……四
六月横濱風景
安藤緋紗……六
寂しさ
青山孝之……八
地上の光
新井太郎……一〇
春の埋葬

麻生恒太郎……一二
秋風
府川惠造……一四
晝
福田正夫……一六
俺の十二時
福田夕咲……一八
處女子よ
五城康雄……二〇
ロボット行進曲
胡麻政和……二二
菖蒲酒
後藤大治……二四

雪
後藤楢根……二六
滿月の思慕
後藤八重子……二八
雪に暮るる
芳賀融……三〇
夢への闘爭
花岡謙二……三二
雪後
橋倉正安……三四
生きる大道
服部嘉香……三六
雪は音樂の姿で

林　信一……三八
眞竹
靄
廣瀨操吉……四〇
兵營のある風景
伊福部隆輝……四二
淺春斷章
池永治雄……四四
娘と畫月と
ふるさと
生田花世……四六
三年の思慕
生田春月……四八

寂寥
稻葉享二……五〇
中華民國の胃腑
打戰
井上逸夫……五二
脂粉の香りに
井上淑子……五四
樹蔭洗髮
井上多喜三郎……五六
ひややつこ
握手それから接吻
井上康文……五八
栗鼠のやうに

伊良子清白……六〇
若布採
岩間純……六二
吾兒を想ふ
雪の降る夜に
同じく
岩佐賴太郎……六四
わが子逝く
泉芳朗……六六
ルンペンの朝
梶浦正之……六八
伊吹颪
勝承夫……七〇

北陸印象
河井醉茗……七二
花鎭め
川路柳虹……七四
萬華鏡
川路せい子……七六
三日月によせて
別れ
北原白秋……七八
ツェッペリン伯號に寄す
木水彌三郎……八〇
寒蟬

衣巻省三……八二
春のアイルランド
統計
近藤東……八四
レエニンの月夜
逃亡
喜志邦三……八六
言語の臓
小林籟……八八
雪片の美學
冬ノ人間
久保田宵二……九〇
六月の林

國井淳一……九二
二人の老農夫
牧野律太……九四
亡き父を思ふ
ふるさとの山
正富汪洋……九六
春の饒湯
窓
松本文雄……九八
春早く散策をつゞける
松村又一……一〇〇
厩の壁
松尾啓吉……一〇二
死の歌

松崎武雄……一〇四
六月
三村達磨……一〇六
村の東やん
三石勝五郎……一〇八
落葉を踏む
溝口白羊……一一〇
或る一區劃
森田綠雨……一一二
家を建てる
森脇達夫……一一四
月夜の焚火
宗武志……一一六

夢
冬
村松正俊……一一八
生活
室生犀星……一二〇
春の邦樂座附近
馬込村
長野晶水……一二二
寒月
奈加敬三……一二四
或る冬の日に
中田信子……一二六
友よなげくな

中村漁波・林……一二八
岐路
中込純次……一三〇
巴里旅情
赤き罌粟
落葉
中西悟堂……一三一
公けの家族の來る日を
中島義佐……一三四
春をさぐる
中山伸……一三六
屋根の上の
南江二郎……一三八

民話・藪に佗ぶ頭大の男
西川林之助……一四〇
奇蹟の電柱となつて消滅する
丹塚もりえ……一四三
遠い聲
野口米次郎……一四四
自嘲の詩
小方又星……一四六
雲
岡田泰三……一四八
かささぎ
岡村須磨子……一五〇
氷雨の春

岡崎清一郎……一五二
銀色樞軸座
恩地孝四郎……一五四
形なきもの
大木篤夫……一五六
燃料
大手拓次……一五八
青空のともしび
大塚敬節……一六〇
眞生頌
小野忠孝……一六二
酒と光
長田恒雄……一六四

窓
尾崎喜八……一六六
女子師範卒業生
櫻庭芳露……一六八
野の草のやうに
佐々木秀光……一七〇
わたり鳥
笹澤美明……一七二
馬齢薯
佐藤惣之助……一七四
魚學
佐藤義美……一七六
風と二つの噴水によるコンポジション●高い海

柴山晴美……一七八
石洞に住む
白戸郁之介……一八〇
春と産業豫備軍
杉浦伊作……一八二
都合的非都會人の憂鬱
杉山隆……一八四
四月の風景
多胡羊齒……一八六
登山
田島嘉之……一八八
豚
高木斐瑳雄……一九〇

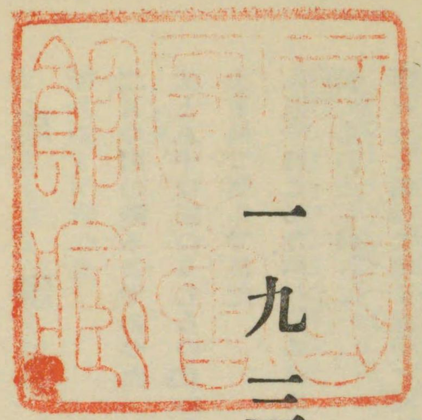
雪の假面
高橋常吉……一九二
江東の一風景
竹中久七……一九四
獨逸經濟思想史挿話
武久勇三……一九六
カフェー街風景
竹内勝太郎……一九八
青
武内利榮子……二〇〇
片われ月
竹内隆二……二〇二
生活手記

玉置光三……一〇四
さざえ採り
巽聖歌……一〇六
プルン
俵青茅……一〇八
浮世繪
東野純……一一〇
白薔薇
月原橙一郎……一一一
冬信
角田竹夫……一一四
生きた原稿
露木陽子……一一六

春だ
藪田義雄……一一八
路上
山口宇多子……一一〇
夢でない二つのこと
山中英俊……一一一
噫呼軍神橋中佐
宇宙
山崎春郎……一一四
殘雪
苔の蠶
八百板芳夫……一一六
忘れられた木馬

與田準一……一三八
貨幣と愛情
米澤順子……一三〇
春のトルソー
吉野信夫……一二一
廢園の黃昏
吉地昌一……一二四
林檎
吉原重雄……一二六
月明

（ABC順）



一九三一年詩集

赤川草夫

雨雪

二月の雨の降る日であつた
父と息子は家のうしろの丘から
土を橇で運んで居た
（息子はこんな雨の降る日にはいやだと言つたが）
頂の方の土が崩れて
下に土を堀つて居る息子を埋めた
（そこは父が息子に言ひつけた場所であつた）
父は頭だけ出して居る息子を

土の中から堀り出した
（雨は雪になりかかつて居た）
息子の右足と腰はひどくうたれて居た
父は傷ついた息子を橇に乘せて
雨雪の降る中を家に歸つた

父

雪は降りに降つた
父は何度も道をつけに出た

秋田縣地方で、雪の澤山降り積つた往來などに、所謂「雪路」をつけるには、「踏俵」と言ふ藁で作つたものを履いて、雪を踏みつぶして道をつけるのである。

天野隆一

六月横濱風景

A litoshi Aizawa

齒竝びの惡いアスファルトの街
がらんとした白と黑と銀の街
金屬の反射に鷗の匂ふ街

突堤の先の稅關が黑子だ
ペンキのはげた燈臺に古典なヨコハマがある

外人墓に三色旗が錦繪の夢をみる

支那人の籠　薔薇色の領事館　動かない船
人力車に乘つた外人が洋家具を見てゐる
口笛を吹きながらホテルで犯人が午睡する

なつかしい通りは花束がガラス越しだ
ハツピイコオトから陽炎が曇つてゐる
正午の砲(ドン)だ！　おや船が一雙ゐなくなつた

安藤緋紗

寂しさ

この寒さを思ひ知らせ様として
北風が
わびしい私をゆすぶりに來た。
白椿をたゝえる様な
しづけさを抱いて
思慕を打消す、者を。
どこにも
すてどころのない

このわびしさを
またも北風は私をおそふ。

青山孝之

地上の光

生命的な線の新村落の上を
實に悠容とそこに住めるものゝ交合歡喜のうちに飛行機が飛行船が飛翔する日は何日か
はいとりぐもとふくろぐもの心理を去つたかの日をこの地球の上に烈々たる意志で私達は翹
企するのである。
私達の兄弟の血しぶきを浴て醉ひ孔雀のやうに尾羽を打擴げて、女肉と赤い濁酒の中に悅を
變態的に求める都會性
お前の背後から疲憊と困惑の底に蒼褪た生氣に乏しい病魔の顏のあることをばごまかすわけ
にゆくまい

いまお前達は全く如才なくしとやかに彼の病魔をごまかした覺りで全人類の部落々々までに
侵食してゐる。もう私達はごまかされはしない、お前達の本體を摑んだのだ、私達はこのこ
とを全人類に警告する
全人類の敵都會性よ私達の矛先に打碎れろ
人類が潑溂とし地に空に文化が咲き充ちるであらう私達が翹望する新村落が近づきの鐸鈴鳴
るあゝ私達の情熱は噴水の如く昇天する。

新井太郎

春の埋葬

靜かに暮れて行くアカシヤの林の徑を
墨色に萎れた花達に護られて
春の棺は影の様に
音もなく埋葬の地へ動いて行つた

葬列が林の中に吸はれてしまつて
夕闇が又濃くなると
しばらくの間

林の奥の何處からか
弱々しく大勢の歌ふ埋葬の歌が
にじむ様に幽かに聞えてゐたけれど
やがてそれも途斷へ勝ちになり
遂に消へてしまつて
何かしめやかな香の殘るアカシヤの林の徑は
も夜に入らうとしてゐるのに
葬列の衆は
一人も歸へつては來なかつた。

麻生恒太郎

秋風

雲の多い朝、
町の空へ大きく花火が上つた。
おれは郷里に歸る友達を驛まで送つて行つた。
完全な失敗だ、
事業にも、女にも！
あいつはそんな事を言つて元氣に笑つた。
本當にあいつの肺は腐つてゐるのだらうか？
おれは石のやうに冷たい友達の手を握つて、

人生に取り返へしのつかぬ失敗なんてないと怒るやうに言つた。
薬鷄頭の咲いてゐる驛前の廣場で、
秋風に吹かれながら、
支那の子供が黑い蛇を吐き出してゐた。

府川惠造

畫

湧き出づる奇蹟のごとく
ゆみなりの刹那刹那は
石垣の面にかかりて
蛇は今　我が眼のあたり
とををにも　つつがなくなく
移るなり　穴より穴へ

そのほとり　水は映りて

水の輪　木理のごとく
小止みなくめぐると觀れば
黄金色のややに明りて
おのづから滿干坐りて
豐深き憩ひを示す

茜

秋の鳥渡りつくして
凍み殘る茜の遠さ
いとせめて我が寂寥よ
ゆきてかの茜の端を啄みて來よ

福田正夫

俺の十二時

机の前に坐つたまゝバットをふかしてゐたら、
下で時計が鳴り出した。
なんの氣なしに數へたのが十二、
俺には夜中なんてない、これからが仕事の時間だ、
仕事は氣がすゝまないけれど、
しなくてはならない、
俺は家族の生命をしよつてゐる。

省線の貨物列車のきしりは遠い、
電車もまだ走つてゐる、

自動車の音が近くなつてまた遠く消えて、
犬が二つ三つ吠えると、
それつきり、硝子の向ふに黑い夜が默つてしまふ。
はたらいてゐる者はまだ多い、
そしてねられないで苦しんでゐる者はなほ多いだらう。

あまり靜かすぎるので、
俺の血が身慄ひする、
こんな夜中にこそ、俺の胸が燃えてくるのだ、
おさへてゐろよ、忍んでゐろよ、
俺は幾度も自分にさゝやくと、
しかたなく唇をかんでペンをとつた。
ペンはきしむ、
恐らく一生これがつゞくだらうな。

福田夕咲

處女子よ（今様調）

なよやかなれや、處女子よ
柳の枝のそよぐごと
匂やかなれや、おとめ子よ
うばらの花の薫るごと
きよらかなれや、處女子よ
天つみそらの月のごと
ほがらかなれや、おとめ子よ
森の小鳥のうたふごと

水のほとり

川沿ひの、家のともし灯
あか〳〵と水にたゞよひ
川の洲の、菅の草むら
さやさやに、そよぐしづけさ

橋の上に、たゝづむは誰ぞ
しのびかに、ひとや待つらむ
月の暈、ほのかに青く
河鹿鳴く、聲のすゞしさ

五城康雄

ロボット行進曲

▽一九三一年觀兵式印象△

氷雨が激しく降つてゐる。斜に激しく。

熱した銃劍の列が次々と行進する。鈍い光を一齊に躍り出る前後に正しく振られた千の腕、まつ黒けの筋ばつて大きい。……千の鶴嘴。千の犂鍬。脚は無數に前進する。脚は一齊に大地をゆるがす。垂直に揚げられる。一分・十四歩。歩幅七十五糎。脚の群は右左に展開する。締め革の匂ひと鋼鐵の顔。どの顔もみな雨にビショ濡れて、疲れて無數に行進する。虚ろに開かれた瞳。然し千の腕は正しく行進する。いつも前の男の銃劍と後頭だけを映してゐる千の瞳。然し行進する行進する。銃劍に附屬した千の疲れた顔が。見分けのつかぬ同じ顔が、それと同數の齒車が。

千の齒車と齒車の千。硬ばつた千の顔と千の煌めく銃劍。

千の齒車と千のネヂ。銃口の圓い千の唇と突嗟に引金を握る千の太指。

千の齒車と千の曲肱。千の銃劍とそれを運ぶ千の脚。

齒車は齒車に齒車は曲肱に曲肱は軸承に、脚は高く歩調をとる。脚は吹奏する行進曲のリズムから一歩すらも逃れきれない。脚胖の白をつけ、平べつたい兵隊靴をひきずつて鈍く整然と通過する。それは何處から流れて來たか。……何處まで流れてゆくのだろう……。

雨にビショ濡れの大地。

雨にビショ濡れの行進曲。

雨にビショ濡れの軍隊。

軍隊は次々と重なり合つて檢閲する將軍の脚下を流れてゆく。（頭ア、右イ！）

よく磨かれた將軍の長靴！　と横切る。汗ばんで虚ろに怒つた眼が齒車が銃身が無數に。將軍の眼底を體内を、指先を。煌めく大勲章。將軍は云ふべからざることを思浮べた。（余はこの精鋭比類なき軍隊を以て……）その殘のシンジツを彼は何處で逃べやうとするのか。興奮が太つ腹をゆつたりと歩かせる。閃めくドアのハンドルの銀。と飴色の車體は樹木の多い流れる風景を映し始める。二臺、三臺、四ン臺滑らかにゆるく……速く。商工會議所歡迎會へ！

氷雨は尙も激しく降つてゐる。斜に鋭く。

軍隊は尙もビショ濡れて行進する。（歩調とれイ！）脚。顔。瞳。鶴嘴。齒車……。

（シネポエム試作）

胡麻政和

菖蒲酒

馬鍬を物置小屋におさめ
厩では牛はゆつくり飼葉をはんでゐる。

田植仕事を終つた吉は
菖蒲酒に醉つて
朝からまつかな顏でとろりとしてゐる。

竹卷をふところにねじこんだこどもが

田圃の畔でぴーい　ぴーいと草笛を吹いてゐる。

——その笛かしてみーい——
よろめく足どりの吉が大きな手をひろげる
——こゝまでおいで——
こどもは　あかんべをして
尻をたゝいてころげるやうにかけて行く。

ひくい藁家は青葉のなかにうづもれて
五月の野つぱらはまぶしいぞ。

後藤大治

雪

わたくしは南の島にすむために
ふる雪がさびしい、なつかしい

銀座あるいてゐるのでか
雪がまつて、うたつて、さゝやくよ」

雪はつめたい女給のやうで
なにかかなしい、おつかない

しきりに寄りそひ、つみかゝり
それでゐて消えて、又つみかゝり」

冷たいまゝに溶けるなら
コケツトのブラブチユアスよ、お前は女

銀座の女給」

後藤楢根

滿月の思慕

僕はこの六角形の窓をもつアパートの
一つ一つの部屋に少女を住ませてゐる
——ねえチル子　ねえルル子
——ねえミミ子　ねえナナ子
——青空がすぐそこまできてゐます、よ。
僕はこのうつくしい部屋をノックして歩く
今晩は！　今晩は！　と大層靜かな聲で

——ねえチル子　ねえルル子
——ねえミミ子　ねえナナ子。
——もうすぐ月が出ます、よ。
僕はこのアパートの一部屋ごとに月の光を碎いて
春の如く明るく佗しい思慕の灯をつけて歩く
——ねえチル子　ねえルル子
——ねえミミ子　ねえナナ子
——いやなアに蜂の巣、蜂の巣。明夜が滿月ですよ。

後藤八重子

雪に暮るる

雪雫ほとほとと
落ちなやませて
曇りしままに日暮るる
春近むころのかすか音に
遠樹の鳥も啼きわぶる

ああ、どこやらで
人の話聲も暮れなづむ

おきどころなき身の夕暮
どうすればよいと言ふぞ。

わが窓の記

わが窓に見ゆるもの
もみぢ・けやき
さるすべり・ゆず
いてふ・ひのき
水色に遠明る空
まして、雀の
雀の子のあたま。

芳賀　融

夢への闘争

部屋が薄暗い
外はしいんと靜まり切つてゐる

僕は夢の戰慄から
逃れやうと身悶へした
——恐怖がガタゴトと音を立てゝ血管を逆流する——
夢で僕を虐むものは
何人だ、何者だ、何奴だ

黑い、大きい、妖精が
僕を十重二十重にしばりつけて放さない

叫び度い
逃れ度い
だが聲はどこからも流れさうにない
　ぶるぶる身悶へして立つてゐる僕
　おゝこの夢！

これが僕の現實へ

夢への闘爭！
そこに僕が立つてゐる

花岡謙二

雪後

あんまりいい天氣なので
やぶかげのエカキの家の七面鳥が
原つぱを越えて
僕の家の方へあそびに來たんだらう
檜垣のそとで
けろッ〳〵〳〵と鳴いてゐるのが聞える
よくみると
垣のすきまから

羽根をひきずつて歩いてゐる姿さへ見える
僕も、ふらふらと
光のなかへ歩きだした

愛について

よけいものだなんて
誰がいふんです
窓ぎわのかごのなかで
ぽつかり眼をあいてゐる赤んぼ
だれもゐないのに
えがほさへみせてゐるとおもつたら
お日さまがのぞきこんで
さつきからあやしてゐるんです

橋倉正安

生きる大道

一すぢの細い道が空のはて遙かに續いてゐる。
私の行く邪の道である。
毎日惱みを深め澁面をつくる道である。
古ぼけた破れ靴の踊るやうに
單調でなんら味覺のない同じ道だ。

もつと複雜した思想のある四辻を、
私を勇ましく、樂しく强く、生かしてくれる大道を、
それがたとひ櫻花のやうであつてもかまはぬ、
武士の一瞬の名譽であつてもかまはぬ、

私は奔流の熱情と共にほしいのだ。
それは長い間、さうだ半生以上も徒費して搜し廻つてゐるのだ。
だが、光明の一端をも見あてぬ今日
いつもいつも私を弱りきつたいぢけた偏屈性にし、
まこと大きな呪の窟の中にだん〳〵と押込めたゞ人生の暗い反面を深めてゆくばかりだ。
孤獨の嵐よ强く吹きつけるな。

またまた相結ぶ人生の本能から
遙か彼方に遠ざかり捨てられて、孤獨よ!!
私は一生過去の坦々たる道を踏まねばならぬのか?
しんみりと一人かく考へた時
私は踊子のやうに急に淋しく泣きたくなる。

あゝ、私の心を滿す生きた大道が强くほしい。

服部嘉香

雪は音樂の姿で

雪は降る　音樂の姿で
靜かに　靜かに　降る　降る
白魚の圓舞曲
くらげの幻想曲
詩のたましひの行進曲

あらゆる美が　雪の底に屆いて來る
家も　木も　愛も　渴きも　悲しみも
みな深深と心を通はす

蟋蟀よ　なぜ　こんな日に鳴かないのか
太陽の烏は　雪を
地球の表皮に咲く優曇華の花だといふ
まこと　雪は　地球の一小微點の化粧だ
低い空からこぼしかける花びらの洗禮だ
——人生の小ささよ　身にしみる

だが　美しいのはやはり雪の底だ
みしやみしやと食慾の音を立てて
雪は　ただ降つて來る　降つて來る
人生の斷片は　ただじつとそれをかぶるのだ
日が暮れれば　あかりどもつけて

霧

夜の霧が次第に薄れて行つた
光の光芒がさあと地上をはいてゐる
白粉はげのした街がそのあさましい殘骸を見事にさらけ出す
馬鹿げきつた電燈がとまどいしたやうに霧の中にぼほけてゐる
光を仰ぐ人人の顏は青菜のやうだ

林　信一

眞竹

庭の眞竹はまづ冬を發散させる
眞白な霜の中でその爽颯たる雄叫びはどうだ
北風の怒號に和して竹はその全身に冬を集中させてゐる
竹――その怒號は雪を呼び風を呼んでゐる

廣瀬操吉

兵營のある風景

彈片のやうな夕月が
森の上に懸つてゐる。
空氣は濕つぽくて生溫く
微風の中をまだ雷の固い野櫻が五六本
同じやうな姿態をつくつて伸びてゐる
私は遙に、堤防の盡きたところに、
儼めしい四角の兵營が森から半分だけ頭を擡げて
空と地上を區劃つてゐる、——
ファンタスチックな風景を愛する。
どの窓にもすでに夕べの燈りが點され
宛も毛穴から清新な呼吸を吐き出してゐる獸のやうに

青味がかつた光りを樹立の中に投げてゐる
晝間は威嚇的な感じさへするこの兵營は、
夕べが來ると妙に宗教的な氣品さへ帶びて來て
その建物の圍りには何か捕捉し難い世界があり
私の側には物質的な醜い世界があるやうに思はれてならないのである。
そして修道士のやうに堅固で屈托のない兵士等の眼が、
そこに特別に彈力のあるムードを醸つて
單調な平野の眺めを脚色してゐるやうに思はれてならないのである。
表は寺院のやうに靜かで內部は河馬のやうに騷々しい
この建物の內外を私は愛する。
私は仕事に勞れると、
塹壕から這ひ出した兵士のやうに、
煤けた顏の前に、いつも
この建物のあることを感謝するのである。

伊福部隆輝

淺春斷章

池塘の青草の上を撫でゝゆくは微風
雪に白い遠いゝ山脈
思郷の少年の眸の愛しさよ
喉、茶色なる燕の脊の紺新らしくして
藍甕に立つてゐる陽炎
紅き襷甲斐々々しや嫁女
日曜の午前　塵なき紫檀の机よ
燻ゆるは紫の煙

思ひは遠きひと
哀しみは眸に澄み
賢こきは未亡人の微笑
黒びらうどのマントルとクライスラーの自働車と春の泥
光るもの、枯草、流るゝ雲、そして、

（作詩者曰く、こゝで又一番初句に還る、又は逆に讀んで行つてもよし。そして幾度でも嫌になるまで讀れたし、願はくば、暗唱出來る程度にまで）

池永治雄

娘と晝月と

痩せほけた寂しがりやのレールを、
叢で、蛙は赤い舌に飲んでしまつた。

青空はつつぬけの殼である。
みえるかぎりは綠の海原である。

あたたかい草いきれにかくれて、
娘は乳房に羞恥を感じた。

炎陽がもえ、炎陽がきえ、
二羽の白い蝶がくるくると地におちた。

晝間の月は間抜の風船である。

ふるさと

ふるさとの瞳はどちらだ、
このからだを横たへる地は何處だ。
遠い山脈はそよともせず、
風は俺ばかりを吹いてゆく。

生田花世

三年の思慕

さらば幸福に力強く生きて下さい

——春月遺書

空のかなたの
群青の雲の下
若い獅子が
突立つてゐる。

海山河をこえて
ぢつと見とほすわたくしは
その一双の凄い眼を
その強い脚を。

獅子が來るか
犧牲がゆくか
運命の旗は
眞赤か　青か

一生涯の夕立を
傾けつくしたい
高い日輪その顏を
眞下から見上げたい。

私が強く生きるために
私が幸福になるために
三年まへ見た「たけしま・あけみ」
あらはれて來よ旅人よ。

生田春月

寂寥

青い木はいたるところにある、
生きた葉は死の表情に慣れて、
尖つた古の重なつた下から
寂しい顔がのぞいてゐる、
風の眼を恐れるやうに。

一つの花があらゆる肉體に咲く、
蝶は光に鞭たれて眩惑しながら、

夢より重く、翅を垂れて、
よろよろと、出口を探してゐる。

疲れた眼は永久に閉ぢられて、
傷ついた心をかくまうてゐる。
あるものはだんだん小さくなつて
最も遠い星に達しようとする。
あるものはただ寂しく微笑する。

數へ切れない夢が、
光の中に飛んでゐる、
齒朶の扇で
光の方へと追はれながら。

稲葉亨二

中華民國の胃腑

杏樂天の一房

南京蟲と風呂を知らない手とが穢した壁
唱酒罷！　噯　支那女は笑つて淫蕩な唇を見せた。
茱椀の一角にギュッと突つ込まれた拇指
二月前からの勞働が化膿してゐる
恐るべき食慾！
私は觀念の眼を閉ぢ乍ら靜かに徐かに鉢を嚙んでゐた。

打戰

南京路で誰何された李が
孫將軍の遺服をまとつて朗らかに出掛ける
空は水素ガスのやうに風景は花のやうに
只遺服の裏には「逃走」が虱と共に巣喰つてゐる
たとひ逆風であらうと袋路であらうと
李は危急の際に勇敢なのだ。

井上逸夫

脂粉の香りに

壁のなかにはかがみがある
かがみのなかのしろい女

女の體臭は花を咲かせる
僕の心臓はそのなかにしずんでゐる
書籍を伏せた僕の手は
水底に躍る魚のやうに淋しい

女の眸は淡い畫の月である

女は窓掛をまきあげた
玻璃窓に灰色のそらが沈透でいるから
冷やかな風景は動かうともしない。

井上淑子

樹蔭洗髪

木の葉があすこでもこゝでもしげつた。
季節の青春だ。
私は桐の葉かげで、
丈なす黒髪をほぐし初める。
——今日は髪を洗はう。

葉もれ陽が器の水の中へとける、
風が露はな肩と胸と腕をくすぐる、

頭をくねらせればなよ〳〵と波うち、
髪は水の中で青黒く光る。

生きてゐるのだ、
私の魂と血とをもつて、その一すぢ〳〵が生きてゐるのだ。
生きてゐるその髪を季節の青春に櫛り、
私はうつとりと葉かげで醉ふ。

風にくすぐられる胸、
葉の青に染まる腕、
——私は誰のものだ。

（五月作）

井上多喜三郎

ひややつこ

鉛水で沐浴をしてゐた豆腐です。
豆腐は中までしろい、
豆腐は四角ですが
こゝろに骨を持ちません。

生薑と醤油が、
彼の人格を
私の舌の上で賞める。

握手それから接吻

（手はこゝろの導體）
握(と)るとふるえてよくわかる。

●

無味ゆえに食(た)べ盡せぬ美味。

井上康文

栗鼠のやうに

栗鼠のやうに首をちぢめて、
くるくると街を廻つた、廻つた、
ボール紙と泥繪具の、
安つぽい極彩色の狂亂の街を。

暗い路次裏に澱む陰欝、
戰鬪意志を外套に包んで、
交通勞働者は當然の要求をした、

黑い影は街角で劍を光らせてゐる、
必死の商業戰が店頭に渦卷き、
生活苦の悲慘と鬪爭が、
新聞の社會面から重壓する。

一九三〇年の苦難はそのまゝ
一九三一年に强引に鎖を嚙ませる。

北國は吹雪、
峠の鈴(すゞ)が鳴つてゐるだらう、
街を疾驅する生活のロータリー
だが私はくるくると廻る、
栗鼠のやうに、廻る。

——一九三〇年十二月十七日——

伊良子清白

若布採

嶋の二月は　若布採り
若布採る日の　寒風に
海はちら〳〵　雪催ひ
若布苅るとて　鎌次げて
すげた鎌の双　船首にひかる
夜明け千鳥の　磯めぐり

嶋の二月は　若布採り

雪のふる日の　薄くらがりに
つめたい覗箱　波が越す
やんれ波越す　船ばたに
あがる若布の　淺みどり
涙垂るやうな　うしほの雫

島の二月は　若布とり
山は南うけ　なぞ江のほし場
わかめかけたよ　日和雲
風も眼をもつ　縄のはし
まだ如月の　日脚ハ早く
若布ほす手の　やれさて忙し

註　覗箱は龕燈形の桶で底は硝子張、海底を覗ふに用ふ。

岩間純

吾兒を想ふ

逝きし吾兒(あこ)によく似たる兒等
綠葉(みどり)影に草を摘みつゝ
吾兒の唄ひし歌うたふ

逝きて一年(ひととせ)吾兒は何處に
父母(ちゝはゝ)偲びて石をば積まん

（山田耕作作曲）

雪の降る夜に

寒夜の鼠走るわが古家
だまつてだまつて降りつむ雪

同じく

靜まり返る大木の森
だまつてだまつて降りつむ雪

岩佐頼太郎

わが子逝く

どうぞ影繪であつてくれればいいが……
覆面した魔者に可愛いい手をひかれて、
昭和六年二月二十四日の
夜明け方の、紫いろの天界へ
ひとりのわが子は、靜かに
忽然と、あへなく消えて行つた。
冷氣と寂漠の深さ！
くづをれたまゝ私と私の妻は、涙を垂れて

まるで氷を張りつめたやうな彼方を
ぢつと凝視してゐたが
やがて胸搔きむしり、髪の毛逆立てて
神の慈悲を蔑すみ、天を呪咀した。
「私の子供をなぜ私の手からもぎとるのだ。」

夜はほのぼのと晴れやかに、黄金と碧瑠璃に
明けはなれて行つたが、しかし
それがもう私に何のかかはりもなく
もうこの私に何をもたらすものでもなかつた。
ああ、わが子は昇天した。
ああ、わが子逝く。
わが子よ！　わが子よ！

泉　芳朗

ルンペンの朝

ゆるんだ硝子戸を叩いて　吹雪は彈(はじ)む
硝子戸の裡には硝子のやうな胸が在る
胸はぼろ〳〵なカアテンの裂目から引ずり出されて
熱量の乏しい風景の中をさまよふ

空虛な夜から方向のない朝を貫いて
今　吹雪の底にをの〵く様々の足跡
無數の生活の切れ目切れ目に寥々と消えゆく　其れ！

街は飢ゑた胃袋である
蒼さめた太陽の下で思想は骨を拔かれた

白つぽい花と神話だけが雪の上に殘る
都會は　ます〳〵昂進する
虛弱の觀念と權力に護られながら
街道はい〵かげんに　大膽に　今日の僕達に應接するのである

何が此んな虛弱な胃袋に消化されるものか
誰が此んな無禮なる應接なんかに答へるものか
僕はペーブメントを蹴つて蹴る　この泥靴で
けち臭い人間の涙なんか捨てちまへ！
僕は道のない道を今朝も探してゐるのだ

おゝ　太陽はルンペン我れの新妻
疲れたあいつをおつ起てゝ氾濫する吹雪の朝を行かう

梶浦正之

伊吹颪

白き山脈に晝の月きえて
藪鶯は山茶花の花をちらしぬ

老ひたる母よ
しばし落葉はく手をやめて
あたかたき綠茶すすらむ
晝物讀める妹よ

尾を振れる愛犬どもに食事を與へよ
今日も庭面を
ひようひようとすぐる
伊吹颪

勝承夫

北陸印象

（或る友の死を心に刻める日）

剃刀よりも冴え冴えとして
鋭い波がしらが海面を覆つて見えた
車窓を打つ吹雪は針のごとく
市振から親不知へ旅人の心は蹌踉とした
鋼鐵（はがね）よりも寒い海の一月
波の上に散らばつた岩岩の上に

黑いわけの判らぬ海鳥のゐるのが見えた
鳥は波がしらと吹雪の中にすくみながら、
私の汽車をしげしげ見入つてゐた

どんよりと重い鉛色の大氣
北海の白と黑と青の交響
こはれた時計をいぢりまはす自分
かくて機關車は高く汽笛を吹きならして
トンネルに突込んだ　轟々とおそろしく。

河井醉茗

花鎭め

やすらひや、やすらひ花や、
　花よ鎭まれ。
砂ほこり、立ち舞ふ中に、
やすらはで、ありともよしや、
影はまぎれむ。
かなたこなたに飛び散らふ
花の花びら
しづかならざる

眞のこゝろを
　をさめて歸れ。

やすらひや、やすらひ花や、
　花よ鎭まれ。
あひあふや、あわたゞしくも、
花は花を、求めつくして、
あとやなからむ。
枝てふ枝にみちみてる、
次の次なる、
花をのこして、
あとかたもなく
　そらに鎭まれ。

川路柳虹

萬華鏡

——シネポエーム

子供が黒板に記す
無數の線、圓、無意味の形象。
ふき消されては散る
白墨の粉は蛾となつて、
四月の空に舞ひ上る。
自然は子供の意志のやうで
木の葉の重なり、枝の組み合せ、

そこに無氣味な煙突——
無茶苦茶で大きな統一だ。
碎ける波、散亂する硝子の粉、
割れる風船、走る汽車、
ばらばらの萬華鏡が作る、
童話の世界の色と光とのなかに
うまく吾々が生れ變つたなら。

川路せい子

二日月によせて

どぶ川にそつとすてる思ひがあるなら
何故私に呉れないの、お月さま、
私はなんだか淋しくて
あなたをぢつと見て居るのに、
あなたは青白いため息を
とぶ川にすてゝばかり、
春がもや〳〵と香つて來て
私の胸はやるせないのに、
あなたはだまつて、川浪を見てばかり、

青白くとがつたほほを
私の胸にすりよせたら、
一緒に私も泣きたいのに、
どぶ川にすてる思ひがあるなら
なぜ私に呉れないの、お月さま。

別れ

春は今宵の月にのり
　思ひのなかに消えてゆく、
うすむらさきの遠やまの
　風にもまれて消えてゆく、
人に別るゝ今宵ゆえ
　春も今宵をきえてゆく。

北原白秋

ツエツペリン伯號に寄す

しんしんとして近づきつつある、
さうさうとして近づきつつある、
爆々として、轟々として、悠容として、颯爽として近づきつつある、
ああ、ツエツペリン、銀白の尾白鷲。
君こそは叡智と幻想との女王、時と空との短縮者、地球を週る急速力の調革、氣流の釦。空
　界の心音。
君こそは精緻なる近代の頭腦、不壞力の母體、はた昂騰する童心の醗酵母體、飽滿の肉、薫
　香の氣嚢。

はた、飄々たる、茫漠たる宇宙の眉、大勇の摶力。
ああ、君こそは高空の放雷塔、飛び來るホテル、鮮麗なる連星のゴンドラ。
虔虚にしてまた無上の眞實、輝く一つの耳、綠色の複眼、雲の上の鰓。
おお、躍躍する、超越する、また蕩搖する、流動する、一氣の飛翔者、發見者。精確なる一
　線のコース。
飛翔する、飛翔する。地上を、綠素を、人類を、山嶽を、海洋を、虹と月とを熱愛する情熱
　の嵐、天上の感覺體、快適なる旅船、ツエツペリン。
來れ、最新にして至純なる科學の處女、壯麗なる花嫁、
ああ、朝は呼ぶ、世界の黎明に呼ぶ、日本は、東方の太陽は呼ぶ。
來れ、汝の太陽は呼ぶ。

木水彌三郎

寒蟬

畫ながら流るゝ霧も
裏淺間、谷の湯どころ、

日南(ひみなみ)に、いのち愛(いと)しむ
ひぐらしの幼なごゝろは、

露けさを、ひとり遊べど
枝移る、羽うらの淡(あは)さ

うつゝなく、沈む遠音も
聽きにけり、軒の落葉松。

信州小瀨の湯にて

衣卷省三

春のアイルランド

マドモワゼルは歴然とした暦で微笑んだ
暦はダブリンの町であつた
菫色のカンテラをふところにして
私の手はそこから辿つていつた
彼女の麗はしく起伏なせる
九十九の丘々よ　九十九の谷々よ

統計

白はめまひのセンチメンタル
黒はづるい
柄ものカモフラージュ
縞は御隨意におまかせするが
白がすりの楚々たる少女はまろばない

近藤東

レエニンの月夜

橋からの下り匂配。黄包車（ワッポッス）は西瓜の種だ。西瓜の種はコムニストではない。

黄浦江の霧は拳銃を亂射した。ソビエエト領事館の窓が多數に散つて光つた。空色の軍艦が水兵を吐瀉した。陸戰隊。透明な哨兵は一着の黄合羽（エロオ・スリッカア）である。

ぼくは月夜を感じた。月夜を。レエニンの月夜を。女は白系ロシヤの食用薔薇。女は機關車のやうにおしかかつて來た。ぼくは轢死する。

逃亡

おんなの髪に昨夜（ゆうべ）の新月が引懸（ひっかか）つてとれない。

おんなの腋毛は飴色の腋毛だ。

窓の港には白いパイロツト・ボオトが搖れてゐる。

おんなと僕は急に悲しくなつた。

日本の軍艦が遡航して入港した。午後三時。

——とうとう驅逐艦が追つかけて來たわヨ。

喜志邦三

言葉の臓

昔は地(つち)の下は地獄であると教へられたが、

けふは鐵の車輪が廻る、閃光と音響——新興科學に駕した生活の前進——廻る、廻る、車輪が廻る。

大都市の底をはしる地下鐵道。河床よりも、頽唐女人の亂舞する窖(あなぐら)の密室よりも、耐震建築の礎石よりも、遙かに深い土壤の底に展開する爽やかな生活、ここには何ものをも貫徹する意力があつて、電動機械がその方向を指導する。

計數と幻想と、鋼鈑と人工燈火を以て變改された岩層の逞しい外貌、そしてまた「地下」なる言語の觀念と聯想の變改……

ああ我等の科學はあらゆる言語の内容を變改した——地獄繪の怪異の世界が、鐵の車輪の廻轉する爽やかな世界となつて、一切の生活の外貌の變るごとくに、一切の言語の臓が變つたのだ。

小林籟

雪片ノ美學

僕ハ眺メタ　朝デアル
庭園ノ松ノ枝ニカカル雪片ノ美學ヲ
ソレハ無限ノ變化ト形態ヲ觀セテ僕ノ美意識ヲ滿足サセタ
ソレハ無限の純粹ナル詩精神ヲ僕ノ胸ニフクラシタ
カサナル枝ト枝ノ變化ハツギツギニ僕ノ詩精神ヲ滿足サセタ
カサナル雪片ノ落下ハ亦時ナラヌ花ホンヲ觀セテ僕ノ美學ヲ滿足サセタ
一日　僕ハ寒サノ少ナイ部屋ノ中デ雪片ノ美學ヲ研究シテ
ポエジイノ世界ノ變化アル種々相ニ滿足シタ

冬ノ人間

透明ナル吾人ノ肉體ノ組織ガヨク視エル冬デアル
透明ナル心臟ノ諸器官ガ劇シク脈動シテヰル
透明ナル血液ハ間斷ナク流動シテ新鮮デアル
透明ナル生命ノ確全タル意識ヨ
ソレハ冬ノ人間デアル

久保田宵二

六月の林

枝をまじえた雜木林の
葉越しにのぞく、空の一點が
はてしない蒼穹の姿で、朗に呼びかける

鳥はうたはないが、
サーチライトのやうに
末ひろがりにひろがりつゝ
太陽の直線が、無數に無雜作に飛びこむ、と、

「お早う」
「お早う」
「お早う」
そこ〻に幸福なさゝやきと、接吻がとりかはされる。
くつきりと映え出された葉群は、朝風に、
これはまた。實に素晴らしい亂舞だ。

幸福な六月の朝！
「オー」抱いた赤ん坊が突然——
とんきやうな聲を立てゝ
勢よく右手をふりかざした。

國井淳一

二人の老農夫

お前の息子が村はづれへ來てゐるよ
あの居酒屋の地爐裡側でお前に會ひたがつてゐるよ

あんな畜生が何だつて村になんど歸つて來やがつたんだな？
都會で食えなぐて村を荒しにやつて來やがつたのよ！
傲慢に土を蹴つて飛び上つた驚奴が
力が盡きて地面へたゝきつけられやがつたのよ！

なあ　お前の息子が居酒屋の亭主に
仲へ立つてもらあべえど話しこんでるよ。
お前に詫る泪をうんと土産にしてな　それがら——

それがら自墮落と白い手と理窟の土産が！
土から一歩でも身を引えだ奴は俺が息子にぢやあねえよ。

いゝや　泪とそれから節くれ立つた手で
お前の大事な土産の可愛いゝ奴をしつかり抱きかゝへでよ。
彼は鐵の腕をはらいのげでやつて來たんだ。
大泥棒共の巣の中から其奴等のからくりを見でやつて來たんだ。
お前の白髪頭と藁屋根を目あでにやつて來たんだ。
開げでやりな　お前の重い大戸を開げでやりな。

牧野律太

亡き父を思ふ

すいすいと立ちならぶ、
檜木立。
晩秋の入陽、
樺色に映え明かり、
落葉踏みゆくこの山路に、
瞼の熱き思ひあり、
ありし日の父や。

ふるさとの山

ふるさとの
やまゆけば、
ありし日の父の姿の、
そこここに見ゆるかなしさ。
あかあかと夕日てりそひ……。

正富汪洋

春の錢湯

春の錢湯の朝、
戀しくなつかしく、熱心に探しあつてる男女、
湯と水とのコランのある隔てを中に、
若く美しい股と股とを向けあつた。

事情を知つてる番臺の
好色で惡性の爺は
二人が僅の距離まで近づき

知らないのを、ほくそ笑んでゐる。

靜に翻る入口の
柳湯と染め抜いた暖簾の側、
桃の花が咲いてゐて蝶々が戯れてる。

窓

やう〳〵開いた　心の窓
事物の内も見え初めた。
私には、早、無くなつた
外面と　其の内面と
別けて　眺むる　習癖も。

松本文雄

春早く散歩をつづける

私の行先を小犬がよろけて行つた。
散歩は何も急ぐことはない、
軒端に遊んでゐるやはらかい街燈を見る、
星は空の奥でまばたいてゐる。

私はさびしい家の前を寂しく通つた。
しづかな住居の先は靜かに、
いとほしみ思ひつゝ路地をしのんで通つた。

春は私の肩先に乘り移つて南へ廻る。
私は沼道を廻る。
私の行先で、
地球は眞つ青な臨月を告げてゐる。

坑道を逃げる蛇がゐる。
礫には跳ねる燐がある
星はさらにふかふかと空にうづもれる
春の茶單は營養を獻立する三月の朝、
ちからを孕んで降りてきて爆發するだらう。
私は今年も春早く散歩をつゞける
春の門をくぐつてゐる。

松村又一

厩屋の壁

——よむ民謡として——

一

厩の壁をぬる時に
二人は書もて時いたつけ

——俺はお前が大すきだ
——あたしも貴郎(ちなた)が大すきよ

その時、おやぢが出てきたで

俺はあわててコテかけた
ヤレサあわててコテかけた

二

あれから何年經つただか
俺等は街さ出てきたが

——俺はお前が大すきだ
——あたしも貴郎が大すきよ

いつまで經つても俺たちの
心は壁の中にある
心は壁のなかにある

松尾啓吉

死の歌

心はその朗らかな舞踏をやめて
今　滯りの一隅に憩ふ、
動かぬ鏡の冷たさに
映るは無意味に死せる表象、
この凍れる生命に
永劫の時間はその影を落す。
盡くることなき創造と新生は、
意識よ！　汝の泉は倦みしか？

腐敗の油はこの暫らくの憩ひにも
既に死の滓を張らんとするに。
再び神秘の靄のうちに、
憧憬の灯を點ずる最後の螢光も
早、わが力に消え果てたり。
今にしてともるわが内なる燈火は、
腐肉の芯に冷たくともりて
沈みゆく黄泉路をてらす燐火なり。
――永生を約せし瞳の、あゝかの！
金色の訪れにあらずして……。

松崎武雄

六月

僕の蓬髪に落つこちて來た二匹の蠅が
完全に〇〇行爲を果して飛んでいつた。

ぽん　ぱん　ぽん　ぱん
風が發動機船の歡聲をはこぶ。

雄鷄を賣られた鷄が
さびしく今日の卵を産まうと鳴く。

早生馬鈴薯がむつちりとあからみ膨らむ六月。
南瓜畑で初なりが臍なのやうな花瓣を落した。

もう豚も臨月。
生命の細胞分裂が
限り無い六月の産殖が
僕をたまらなく愉快にする。

三　村達麿

村の東やん

うすばかの東やん
東やんは牛のやうにがんぢようで、畠仕事だけ上手だつた
東やんは働いて小金をためたが、いつか叔父さんにごまかされてゐた
東やんは怒ることを知らなかつた、東やんはたゞ働いた
いつもあんぐり口を開けて、たゞ土だけを友達にして

私は東やんが可愛さうでならなかつた、私は叔父さんを憎んだ
叔父さんは——

叔父さんは小作爭議にも加はつた
それなのに東やんの金をごまかす
それほど叔父さんも苦しいのだらう
そう思ふと私は叔父さんを憎めなかつた
私は村をおもつた
灰色の村の姿が浮び上つてきた
灰色の中に怒は氾濫してゐたが
村人の無智は都會を憎ませなかつた
村人はまちがつて都會の勞働者と握手してゐた

村はごまかされてゐた、叔父さんもごまかされてゐた
うすばかの東やん
東やんは叔父さんでもあり、村でもあつた

三石勝五郎

落葉を踏む

私は思想がかれかけてがさつく落葉を感ずる。
落葉の中に光るはエメラルド
又溪川の冷たい眼！
落葉を踏んで鳴く鹿を感ずる。
鹿は私の思想の表現
角生えて虚空に走る。
私は雲を感ずる。

風を感ずる。
風と共に東西南北吹き渡り
思想の森に來て、翼をたゝみて石となる。
永遠の沈默は石に宿り、無限の眞理は花咲きかをる。
私は路傍の巡禮か
チリ〳〵鈴を振り、かれた思想を蘇らす。

溝口白羊

或る一區劃

破れた心臓に灯が點つてゐる。
うすじろい光焔が
微かに息づいてゐる。

みんなが
それと無關係に
うはずつた聲で
麻雀を爭つてゐる。

むつとする溫氣の中に
肉の感觸が烈しく
をどり狂うてゐる。

騷がしい中の靜な、或るスペースだけの
寂しい一とくぎり。
心臓の灯は、たつた獨で
消えたり點つたりしてゐる。

誰も知らない。

森田緑雨

家を建てる

簡素ながら
私はこの貧しい家を建てた。
母は妻はみんな擧つて嬉んで呉れた。
私も勿論嬉しいのだが
父のない寂しさが一入深い。
子供は玩具をもてあそぶ。
大人の玩具は地位や名譽や家を建てることであらう。
私もいつか一人前に貧弱な家を一軒建てた。

みんな擧つて祝詞をのべて呉れる。
だが私は始めて人間の所有そのもゝの内にある心の空虛(うつろ)さを感じる。

買物

ひとりは寂しい
だがまた群衆の中はさらに寂しい。
湯沸と、既成品の安靴と、妻の炊事足袋と私の下駄、これらきりつまつた生活必需品の買物。
妻よ、明るい街をさけよう。そこは私達の世界ではない。星は風のように冷たく
この貧しい買物に人間の眞實を想はせるやうだ。
ひとりは寂しい。だがまた群衆の中はさらに寂しい。

森脇達夫

月夜の焚火

人々は默りこくつて何かを考へてゐた
あるひはつかれてゐたのかも分らない
焔がぱつと燃え立つと、廣い内部は急に明るくなり
暫くして又勢が落ちた
そこには月影は少しも射し込まなかつたが
しかしみんなの後(うしろ)にのしかゝつてゐる黑い大きな影法師は
自分達の頭の上で
屋根が鏡のやうに光り

青白い地上には木乃伊の月が
ひそひそと降り積むけはひに
耳を傾けてゐたのである

宗　武　志

夢

母上は白い猫を抱いていらしつた
母上は遠くを見ていらしつた
遠くから白い象がやつてきて
母上の猫を食べてしまつた
わたしは睡つてゐた
母上の圓かな膝に
わたしの睫のさきの
白い月はこぼれた

冬

からら　からら　と
日が廻る
つらら　つらら　と
木が光る

冬の日の
冬の日の
さびしいものは
うたつてゐる

村松正俟

生活

都會は數千の魅力を以つて人にせまる
享樂は世の人のこと、おれの知らないところ
だがおれは都會の誘惑に抗しない。頭をたれて
おれは夜の銀座に出るおれの心の聲を聞くまいとして

おれはカフェに入る。酒は、煙草は——
おれはひとり卓によつて、足をのばす
さて新聞をとり出してゆつくりとそれを讀む

あたりの騷ぎはおれの外の世界だ！

おれは眼をあげる。光と影との交錯のうちに
手があがる　話が飛ぶ　酒が散る
擾亂は醉と共に增して。媚態と本能と！

その眞中にゐて、おれは氷のやうだ。誘惑はおれを導きながら——おれは感じない
——ここにもまた一つの生活がある——おれの心がいふ

室生犀星

春の邦樂座附近

白い陸橋
橋のしたの圓い胴
橋は水の上へでまがつてゐる、
或いはちぢんで崩れてゐる、
舟が行く、舟は橋の下を通る。

暗い水はドロ〳〵太鼓のやうに濁り、
濁つてゐるから

映るものが美しくなるのだ。

モロツコがかかつてゐる邦樂座、
音樂が溝いろの川の底から聞え、
それが泡つぶになつて浮いてゐる。

電車道にはカフエ、コロムビア。

馬　込

秋深い暖かい午後すぎ
門の前を子供をつれた母親らしいのが通り
小川が汚ない溝川に變つたのを指差しながら言つた
「ずつと前に此の川に蜆がゐたことがあるのよ。」

長野晶水

寒月

寥れた片面に脺(ヒカリ)を受けた五錢白銅貨が〇只一枚！……財布の中で哭いてゐた。
三日月は〇切爪よりも冷たかつた。
蹌踉として襟を搔き合せた〇心の隙間洩れた脺(ヒカリ)が〇氣味惡く其裡を梳き過ぎた。
彼女の自尊心は〇ピーンと高くで〇澄し込んでゐる。
理智の〇光つたピンで〇感情を留めてゐた。
美しかつたが〇其は餘りに澄み過ぎてゐる。
濕地の地下室に〇燐の樣に發光する蒼白く疾める〇女の裸體。
心を觸れゝば〇或は芒の葉の樣に〇剪れるかも知れない。

▲私(フル)●にひりすとが●氷の破片の中に落ちた脺(ヒカリ)を拾つてゐた。

奈加敬三

或る冬の日に

それは、冬がれの
誰ひとり待ちあはぬ船着場だ、
ひとあしひとあしに搖れうごき、
堀割の水のブロンズに銀をうたせるばかり……

對岸のレストラントのバルコンに、
鉢植の木が枯れすがれて、
にぶい夕陽の橋桁をくぐり、

かもめもいつか消えてしまつた。

わたしの待つボートは來さうにないが
冷い木椅子に坐つてゐると、
心はなぜか落ちついて、
マロニエの枯葉でも落ちて來さうだ。

大阪長堀にて、一月

中田信子

友よなげくな

濁江の小さき舟の舟ずまひい、
五月の幟の立てられてゐたのを、
たしかに見て來たことのある私の眼である。
終列車の出たばかりの構内の、
まだぬくみのある軌道の上で啼く虫のうたを、
たしかにきいたことのある私の耳である。

龍膽のけなげにも咲いてゐた、

壞え崖の險しさを、
たしかに歩いて來たことのある私の足である。
朽ち木の下かげにすら、
父の好む茸ののこされてあるのを、
たしかに摘みとつたことのある私の手である。

淸冽なる白梅の花は、
まづ此枝より咲くといふことを、
たしかに知つてゐる私のこゝろである。
私の愛するものの、
あなたが捨てやうとしたこの世の隅で、
ふと見つけだされた私であつたものを……

中村漁波林

岐路

岐路と云ふものがある、
いまのおれは
何度目かのそれの上に立つて居る、

手も足も出ない境涯に落ち、
その度びに藻掻いては切り拔けて來た
この手だ、腕だ、
所詮、

過去は無事ではあつたが、

岐路！　ふたゝび座礁、
暗中に血脈を探ぐれば
さらにこの生命の流れ、
詩に生きんとせば
悠々。――（飢餓の道）

中込純次

巴里旅情

赤き罌粟

赤き罌粟ほのかに匂ふ
六月の巴里のくもり。

赤き罌粟しきりにくづれ、
その下に書のたば切る。

落葉

青芝の上に
敷きならぶ
黄色き落葉。

悔恨の上にまた
悔恨しきならぶ、
わが胸に。

青芝の上に
敷きつもる
黄ろき落葉。

中西悟堂

公けの家族の來る日を

そこでは動亂が一人の聲を掻き消すだらう。
盛りあがる無智が一人の聲を呑むだらう。
そこは不滅の夜に支配されてゐるだらう。
腹立たしい寂寞に蔽はれてゐるだらう。

だが肌のぬくみをあまり惜むな。
身を曝せ！　きびしい渦に。
所詮この熱望を試みるためには

荒れる海におのれの今日を投ぜねばならぬ。

そこで呼べ！　聲の涸れるまで！
斃れるまで！
神聖なあの日の夢を
公けの家族の來る日を。

中島義佐

春をさぐる

ほう、雲のにほひがする
眼らんだ河に搖れて

みづのなかに
目高がまどろんでゐる
いつぴき　いつぴき　かげのように

ほう、うつとりと

水邊のぬるみに
蕗の芽が伸びてるやうな氣配だ

ぼくは
透明なひかりを掌にうけ
そらを仰いだ瞳に
春をさぐる心が展くる。

中山　伸

屋根の上の

屋根の上を照らす月のひかり
屋根の上に降るつめたい夜の雨
また　屋根の上を吹きこえる朔風
屋根の上をまろびゆく落葉

臥床のなかによこたはりながら
深夜　私はいつもそれらを素肌に感じ
私はときどきそつと涙を拭く

屋根の上の
わがみが　一枚の瓦でもあるかのやうに！
夜もすがら身に雨を浴び
また　夜もすがら素肌を月に晒らし
あゝ　瓦とともに老ひゆく自分のいのちと
瓦とともに失せてゆく青春の夢と……
私はいつも夜の空をながめながら眠むる

南江二郎

民話　藪に佗ぶ頭大の男

腹　臍によぢれ　足　す枯れたる　聰しげなる男は、人に優れて　生活の術も知りしが、働かん身に　過大の頭　あまりに重たければ、せんかたなく、ひもじさに耐え　ひもじさに耐え賢く　竹林に佗び過しぬ。

さあれ　今宵も、明日のあてなき日の　やがて暮るれば、雀等　つどひ來りて　樂しげにうち囀づれり。

聞きつる程に　聞きつる程に、こころ狂はんことを怖れ、かたき青竹の間を選びて　過大の頭　堅く狹ませ、するどき竹の　するどき痛さに　すすけたる心の　ねぢつぶさるる事をの

み、ひたすらに　ひたすらに、乞ひ願ひて　伏しゐたりけり。

あはれにも、笑止なる男ならずや。

西川林之助

奇蹟の霜柱となつて消滅する

物語と僞の統計表を活字に印刷して
衆人の精神に變化を起す
深刻的な游導物
古證書を反古して循環する鬪爭の派黨
遠い蒼空の氣流の如く內體も溶解して
闇の中へ巡禮に出る
人間界は未知の氷冷氣分で封銷して
空の吾々の五體の後を疾過する

假りに魂が
事業や現實の市場に出でても
いつか優婉な誘惑に罹ると
奇蹟の雲柱となつて消滅する

——農爭景詩——

丹塚もりえ

遠い聲

靄をふくんだ夜氣のなかを、
私はひとり歩いてゆく。

どこかで木の芽のにほひ、
どこかで花のひらく音。
そしてうるんだ星ぞらからは、
とほいひとつの聲がする。

答へようと耳をすませば、
その聲のいよいよ遠さ。

聲をのんで、
胸を抑へて、
私はひとり歩いてゆく。

さびしいけれど、
きまじめに、せい一つぱいに。

野口米次郎

自嘲の詩

昨日は詩を幻と感じ、
恐怖に打たれ魅せられ、引寄せられまた後へと追退けられた。
半分しか知れざるものは壯嚴だ、
それに接するの歡喜は神秘だ、
時には詩を愛人と叫んでその頰に接吻した。
時には化物と叫んで吐氣を覺えた。
私は詩に翻弄されたであらうか、
詩の本體を見定めることが出來なかつたであらうか。
だが、詩に對する私の態度は愚かであつても嚴肅なものであつた。

恐怖は私を悲しい感情の人たらしめた。

ああ、今日の私はどうだ、
微塵の恐怖を覺えないほど大膽だ、いなづうづしい、
私は詩を薄暮のなかから引摺り出し、
その泣顏を天日に曝らして、
昨日の魅力何處にあるやと嘲笑した
私は今は悲しい感情を失つて、
冷い『第二の思想』を拾つた
……第二の思想なんてものは何の役に立つ
お前はまるで昔の首切り役人よろしくだ、
お前は昨日の自分が戀しくないか、
馬鹿め、くたばつて仕舞へ！

小方又星

雲

氷山のやうな雲が、
青空に悠々と浮いてゐる。

私は愛さねばならぬ。
相對的の愛なんかあるものか。
さうだ、信じなければならぬ。
敵はこの弱い私自身である。

私は純精なものを欲する。
虚心坦懐な姿だ。
幸福か不幸かは問題でない。
私の胸にも雲が湧いてきた。

（昭和三年八月）

岡田泰三

かささぎ

かさゝぎは、
日のくれぐれ。

道とほく、
空にたゝかひ。

まぼろしの、
白帆をかなた。

ひたむきや、
ひかり耀き。

藹たけき、
舞やその舞。

きびしきは、
白、ひと色。

空のこゑ、
なほはろばろに。

うつゝなり、
目ざましきもの。

岡村須磨子

氷雨の春

白狐の衿巻がほしい
皮の手袋もほしい。

外は氷雨です。
私は空虚(うつろ)な春を抱いてゐます。
いくら火を燃やしても溫まりません
熱い紅茶でも沸して下さいませんか、
赤いチューリップが小さい鉢の中で

溫室の暖を大切に保たせながら力一ぱいに咲いてゐます
この花を一口に呑みこんで
素的な戀でも味はつてみせませうか。

氷雨の春は空虚です。

岡崎清一郎

銀色樞軸座

自分ハ數學ニ趨ク
自分ハ衿卷ニ映ル鶴鶏ヲ瑣事ナモノト想ヒ、アル家系ニ關スル傑作小說ノ中ニ牡蠣ノ情緒ヲモトメタ。
榲桲ノ下揭圖ヲミル。
時計ノ美シイ樞軸座ミテタノダ。
頗ルココロ惹カレ、小光線ノ歇ムナキ活潑ナ運動ヲ讀ミツツアツタ。自分ハ帆ヲ悉ク揚ゲタ
水平ノ焦點ヲ纖密ナタメニコノミ、例令ヘバ擲石ノ達スル距離ヲ計ツテヰタ。
自分ハ軍艦ヲカク。

煙筒ノトコロニ白薔薇ノ光塊ヲ抹スル。
自分ノ口胃ハ穀物ナドノ傷害ヲウケ、二輪車、或ヒハ小鹿ニ乘ジテ、峭シイ主智ノ海角ヘ模索シユクヲタノシンダ。ソコニモ春ノ芽條ハ綠玉ノ雅美ヲ以テ物言フヲ識ルカラ。
自分ハ衿飾ヲコノム。
自分ハ空氣ランプニ溶ル。
春ハ蚤ス。

恩地孝四郎

形なきもの

朝
ふり敷いた雪に散る光
室のうちはまだ冷えびえとしてゐるに
どこか幸福なものが心に芽ぐんでゐる
瓶のヒアシンスに凝つてゐる蕾、
ひえびえと冷氣のしみる肩に私は飢を感じながら、
何か幸福なものを身にする
朝

私の捉へるものは形なきものであるが、

——12. 2.——31

●

美しい孤線を虚空にひく、
空は青さが消え、一面の白紙、
誰がこの美しさを描いたか、
はるかに愛するの泛ぶ。
誰としもない愛する人が

——12. 2.——31

大木篤夫

燃料

日本アルプスの雪中で、人は發見したといふ。
青々した蔥の新芽を。
蔥の新芽の羹で、人はあたゝめたといふ、
自分の凍えた唇を、さうして仲間たちを。

地上に冬があるかぎり
われらは記憶しなければならぬ、
何よりも火を燃すことを、

そこに集まつてあたゝめあふことを、
乏しい石炭を、薪を、油をわかちあふことを。
さうして、さらに記憶しなければならぬ、
これらの燃料も、つまり生命の火によつてわかれたることを。

この火の氣もない　路地裏の二階で、
雹の打つかつて來る硝子戸の中で、
凍えながら、わたしは吸ふ、
「蔥の新芽の羹」のすばらしい話を吸ふ。

大手拓次

青空のともしび

この身は　ふりしきる雪のうへにとぶ一羽の鴉、
この身は　ゆくへもさだかならぬ　めくらの舟、
ささげまつる心はもえて
ひとときも　やすまらず、
たちこめる霧の手にとらはれて
へうへうと　色のさめはてる。
この身は　あを空にくゆるともしび、

にほひは　とどまらず、
つみかさなる　まぼろしを
ふきちらし　ふきちらす。

大塚敬節

眞生頌

葉もない
幹もない
根が土からのぞいてゐる
冬に堪えてゐる

木枯の中では梢はちぎれとぶ
何にもかもふり捨て
根は土をかむつて生きてゐる

葉を、幹を、花を
その中に包んで生きてゐる

×

吹きつける嵐に
僕の家の窓は破れる
「妾にもあなたと同じ苦しみを苦しまして下さいませ」
吹き破られた窓に頬を寄せ
生きてゆかうとする
——僕、妻。

小野忠孝

酒と光

只ひとり、
酒汲めば、
口笛吹きたくなり、
涙ぐむ。
何と云ふことなし、
朝の日射しに。

深山

遠く深山に來れば、
何んの木か知らず、
いち早く若葉せり。

何んの風か知らず、
わが面をかすめぬ。

尾根に上れば、
とどまりて動かぬ雲よ。

果しなく淋しかりけり。

——郷里・上州・赤城にて——

長田恒雄

窓

きるしゆ　きるしゆ
夕ぐれのビルディングの窓々は
いま、鳴り閉ぢる

娼婦の施粧のやうに、ビルディングは
つめたく、固く
たゞまつしろな壁のつながり、
そこに開いた無數な窓、窓、窓に

きるしゆ　きるしゆ
重い鐵扉が、いま鳴り閉ぢる

ほの淡い夕ぐれのひかりのなかにひびいて
その音は
きるしゆ　きるしゆ
崩れ落ちるの壁のやうに、ああ